

巻頭言

いまこそ連帯と協同のちからを

榎本 木綿(協同総合研究所)

福島第一原子力発電事故から3年目の今春、夜ノ森(双葉郡富岡町)の桜を初めて見た。全長2.5km、樹齢百年以上の大樹も含む1千5百本ものソメイヨシノがつくる幻想的な桜のトンネルだ。それを一目見ようと、全国から大勢の人が押し寄せた桜の名所のひとつだが、いまはこの桜を愛でる人びとの姿はそこにはない。周辺の住宅街も人気はまるでなく、ベランダには干したままの洗濯物が風にたなびき、避難の際の緊迫した様子が伺える。あたかも2年前から時が止まったかのようなのだが、木々は自然のサイクルのなか、一見するとなにも変わらずに、美しい花を咲かせていた。

3.11以降、私たちは脱原発を訴えてきた。被災地の、とくに福島へのコミットを続けてきた。福島の人たちと一緒に、菜種やひまわりの種をまき、刈り取り、油を搾り、朝市に立ち、小さな仕事おこしの種を蒔いてきた。2年を経ていると思うのは、福島の人びとの苦しみの深さと複雑さ、それでも負けまいと前を向く粘り強さと協同の精神の気高さと美しさである。

原発に関して、私はあまりにも無関心だった。できればなくなってほしいものく

らいの、遠い話でしかなかった。都市部に暮らし、電気を使って生活している自分の日常を考えると矛盾に満ちており、ましてやその向こうに誰かの犠牲があることを我がことに引き寄せ考えてもいなかった。そのことを、いま、深く恥じている。ひとつ、心苦しい思いとなっていたことがあったが、それすらも福島原発事故がなければその苦さを増すことはなかっただろう。

2009年の春、小学5年生になった友人の息子が、「プルサーマルを止めるための子ども署名」という運動を始めた。彼は偶然耳にした大人たちの話から、家から70キロ離れたところにある伊方原発にプルサーマル発電のためのMOX燃料が搬入されるのを知り、それがなにを意味するのかを調べ始めた。知るほどに恐怖を覚えた彼は、至って民主的な手段を取った。クラスの友だちに、そしてその友だちにと、説明に走り、ひと月の間に18歳までの子ども288名が賛同し、署名した。「ぼくら子どもや生物が安心して暮らせるような未来を考えてください」と、プルサーマル計画に反対する請願書を愛媛県議会に提出したが、日本には資源がないことを理由にあっさりと否決された。自分たちの真剣な想いを真正面から

受け止めない大人たちに対して彼はとても失望した。その時の彼らの請願書にしたためた想いの一部にはこうある。

大人の人にやってほしい事

- ・やりはじめたことの責任をとること。
- ・前に人のやった無責任を、解決するようがんばること。
- ・こわれてしまった自然を元に戻す努力をすること。
- ・それから、これ以上自然を壊さないこと、です。

彼らのこの想いを私たち大人は真正面から引き受けてきたのか？ 次の世代へ引き渡すべきバトンを汚していることに目をつむってはいないだろうか？ 3.11以降、私は自分自身に問いかけ続けている。

原発事故以降もこの国は国民の生命や健康と引き換えに経済的利益を優先し、事故を起こした企業も原子力エネルギー政策を進めてきた政治家も官僚もだれも責任を問われない。これほど深刻で、広域な害をもたらした罪は誰にあるのか？ 「大人は誰も責任を取らない」そうつぶやいた小学生の彼の声が耳から離れない。

わたしは『分断』という言葉も、『連帯』という言葉も、馴染みのない世代に生まれた。こうした言葉の本当の意味を2011年という年を境に、福島の人びとの苦しみを通じて、実感している。

事故以降、福島には『分断』がそこらじゅうにある。東電と国によって一方的に押し付けられた補償基準の線引きによって地域の中が分断され、子どもを連れて避難するかしないかで家族、夫婦が分断された。日々の夕食のメニューにすらそれは存在する。世代によって食べるもの、調理法すら異なり、ましてや同居もままならない家庭が多数ある。現在も15万4千人以上の人びとが避難し、内5万7千人が県外避難を強いられ、慣れない生活環境と将来への不安に苛まれ、帰るか帰らないかの選択から家族や周囲との間に分断が生じ、避難者を受け入れ続けてきた避難先の住民との間にも分断が生じている。未来への絶望から自ら命を絶った人たちもいる。

しかしこうした中でさえも国や電力会社、関連会社は国民の健康や権利を優先するどころか、被害を等身大で明らかにせず、過小評価し、安全神話を再構築し、原発再稼働と他国への輸出にやっきだ。いまだ福島では高濃度汚染水が漏れ続け、時々仮設の冷却装置が壊れるなどシビアな状況が続いているにもかかわらずそれを行うということは人類に対する犯罪であり、不正義以外のなにものでもない。

私たちはこの被害を繰り返してはならない。これほどの多くの人びとに苦しみと重荷を背負わせ、尊厳を踏みにじることをなお強いる政策に人間としての怒りを禁じ得ない。そして、福島原発問題だけではなく、沖縄の基地問題、水俣をはじめとする数多くの公害問題もこの犠牲の構図と同様

であることを忘れてはならない。

地域に根差し、共に生きる私たち協同組合人はいまや足元の課題から地球規模の環境問題にまで対応することが求められている。しかしそれこそが我われ協同組合たる所以である。我われ協同組合のミッションは、他人任せではなく自分たちの暮らしのなかから様々な問題、エネルギー問題や原発問題を考え、行動することであり、正義と平等、公正を求め、全国の仲間とともに

連帯し、相互に支え合い、支援し、ともに闘い、国民的世論を形成し、社会を平和で、よりよいものへと創造することである。

私たちには問題を解決する意思と能力がある。連帯と団結が最強の武器である。原点にある「彼ら(他者)」の被害と痛みを忘れず、我がことに引き寄せ、次の世代にこれを受け継がせないことを果たそう。

福島原発事故は終わっていない。いまこそ、我われ協同組合の真価が問われる。